

## 論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 学 術 ）	氏名	申 智娟
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
宮内庁書陵部蔵『春秋経伝集解』鎌倉期点による日本漢音の研究			
論文審査担当者			
主 査 教 授 佐々木 勇			
審査委員 教 授 中村 春作			
審査委員 教 授 竹村 信治			
〔論文審査の要旨〕			
<p>本研究は、宮内庁書陵部蔵『春秋経伝集解』文永五年(1268)書写本に同年に加点された訓点を資料として、その漢字音注の全体を整理し、それに基づく日本漢音の歴史的研究を行なったものである。</p> <p>学界未調査文献の全体調査による全漢字音注の分析と考察結果の初公表であって、非常に価値が高い。</p> <p>本研究は、研究篇と資料篇との二部からなる。</p> <p>以下、章立てに沿って、論文審査の要旨を記す。</p> <p>【研究篇】</p> <p>I. 序 論</p> <p>1. 研究目的</p> <p>2. 先行研究</p> <p>3. 研究資料および研究方法</p> <p>序論では、日本漢音の体系究明に当たり、なお未活用の重要文献が残っていることを指摘し、本研究では、その重要文献の一つである宮内庁書陵部蔵『春秋経伝集解』文永五年点を採り上げることがを記す。そして、その全音注を抽出した上で、研究することを本研究の目的とすることと、その研究方法とを述べる。</p> <p>II. 本 論</p> <p>第1章. 仮名音注分析</p> <p>第1節. 果摂 第2節. 仮摂 第3節. 遇摂 第4節. 流摂 第5節. 效摂 第6節. 蟹摂 第7節. 止摂 第8節. 通摂</p> <p>第9節. 江摂 第10節. 宕摂 第11節. 梗摂 第12節. 曾摂 第13節. 山摂 第14節. 臻摂 第15節. 咸摂 第16節. 深摂 第17節. まとめ</p> <p>本章では、本文献に豊富に加点された仮名音注を、中国中古音の枠組みに沿って、体系的に記述した。日本漢音の体系に一致する音注は、資料篇の分紐分韻表に記し、研究編では体系から外れる例について、挙例・考察を加えている。その結果、本資料は、清原頼業</p>			

『春秋経伝集解』保延五年(1139)点として現存するような清原家の古点による仮名音注を、ほぼ正確に移点したことが確認された。そのため、日本漢音体系に一致しない例は、少ないことが知られた。

## 第2章. 反切・同音字注分析

第1節. 反切・同音字注における例外字規定

第2節. 反切・同音字注の加點様相

第3節. 反切上字分析

1. 牙音 2. 喉音 3. 舌音 4. 唇音 5. 齒音 6. まとめ

第4節. 反切下字分析

1. 果摂～13. 咸摂・深摂 14. まとめ

本章では、本資料に加點された反切全体の総合的な研究がなされた。北京図書館藏宋刻宋元遞修本『經典釈文』と比較した結果、約 95%が一致していることが判明した。一方、『玉篇』『切韻』『宋韻』からの反切引用も存することが明らかになった。

出典を明示しない反切・同音字注を分析した結果、『広韻』との一致率が高いことも明らかになった。これについて、『經典釈文』には無い反切・同音字注を、加點者が『広韻』から引用したものである、と考察している。

## 第3章. 声点分析

本章では、本資料の声点が、従来言われる如き、保守的なものではなく、鎌倉時代における日本漢音声調を反映するものであることが述べられた。具体的には、全濁上声を去声化させる比率が非常に高いことが分かった。加えて、平声・入声における輕声の消滅もかなり進んでいたことが知られた。

## Ⅲ. 結 論

本資料の音注、仮名音注、反切・同音字注、声点の分析を総括し、反切・同音字注、仮名音注、声点の順に、保守的であることを指摘した。特に、本資料の声点が示す声調は、文永五年(1268)加點時のものである、とする判断が示された点は、重要である。

### 【資料篇】

宮内庁書陵部藏『春秋経伝集解』文永五年点分紐分韻表

宮内庁書陵部藏『春秋経伝集解』全三十卷・文永五年点の全音注を、中国中古音の体系に従って整理した分紐分韻表である。今後の日本漢字音研究における基本資料を、学界に提供しようとするものである。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 29年 2月 17日

